

富山如大地

— 第149号 —

発行人
北島 昭彦

発行所 富山市総曲輪2丁目8-29
真宗大谷派富山教務所
編集 富山教区如大地編集委員会

電話 076-421-9770 FAX 076-421-9799

教区・別院ホームページ

富山東別院

検索

教務所アドレス toyama@higashihonganji.or.jp

疫癘^{えきれい}によりてはじめて死するにはあらず

『御文 四帖目 第九通 抜粋』



もくじ

・富山教区同朋総会講義録
白山勝久氏

2~13

・研修会報告

14~16

・お寺紹介

17

・座談会報告

18~20

・書籍紹介

21

・教区だより

22~27

*** コロナに問われる我が身 ***

コロナ禍で、こんな話を聞きました。ある住職が月参りの時、除菌スプレーで玄関のスリッパをシュシュ、座布団シュシュ、小鈴のバチをシュシュ。お家の人、頭にきて「住職、このお布施のお金、誰が触つとるか、わからんから、よく消毒しられ」。

昨年の三月三十日、京都産業大学の学生に始まり、県内にコロナが蔓延しました。すぐに犯人探しが始まりました。「どこだ？ どの誰か？」地域・店名が公表されると私たちは、そこへは行きません。でも、保健所により、消毒され、安全なはずなのに？

誰もコロナに感染したくありません。でも、どんなに気を付けていても、感染する縁に遇えば、私はコロナに感染するのです。

私が、感染しているかもしれない。だから、人に移さないようにマスクをするのです。コロナが出たお店に行つて、「今回は大変でしたね」それが人としてのあり方、優しさではないでしょうか。

徹頭徹尾、私は自分が大事なのです。何もない時は澄ました顔をしています。いざ自分に火の粉がかかると本性を現します。ティッシュ・トイレットペーパーがなくなるう。

「少欲知足」欲少なく足ることを知る。でも私たちのあり方はどうでしょう？「多欲不足」持つていても、足りなくなるのではと不安に駆られる。

コロナから人としてのあり方が問われています。あなたそれでも人間ですかと。

「奪い合えば足りぬ、分け合えばあまる」

あいだみつを

第十組 永福寺 長 真寿

【富山教区教化テーマ】

「なむあみだぶつ」を訪ねませんか？

富山教区同朋総会講義録

慶讃テーマ

「南無阿弥陀仏

人と生まれたことの意味をたずねていこう」に学ぶ

東京教区 西蓮寺 副住職 白山勝久氏

「宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要」のテーマである「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」に込められた願いを学び、私自身にとつての慶讃法要を確かめる機会となることを願って二〇二一年五月十二日、講師に白山勝久氏を迎え、教区同朋総会を開催しました。

本誌では、その講義録を掲載させていただきます。

慶讃法要にむけて

東京教区 西蓮寺副住職の白山勝久です。本日は同朋総会という大事な場にお声がけをいただきありがとうございます。

二〇二三年にお迎えする「宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年」の慶讃法要のテーマを「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの

意味をたずねていこう」と掲げさせていただきました。今日、慶讃テーマ委員としてお招きいただき、みなさんの前でお話しをさせていただきます。くご縁をいただきました。

ご本山の築地塀や『同朋新聞』などで、「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」という慶讃テーマをご覧になった方もいらっしゃると思います。けれど、「このテーマにはこういう意味があります」という話を、テ

マ委員あるいはご本山の職員や住職方から丁寧に直接聞く機会のない方がほとんどです。そういう意味では、このテーマに出会った一人ひとりが、テーマの意味を自分のなかで深めていただければいいのだと思います。

はじめはよくわからないテーマだと思って、心に留めていただいて、折にふれて「そういえば、テーマに南無阿弥陀仏が入っていたな」と思い返し、そのときに「南無阿弥陀仏ってなんだろう」「私にとつての南無阿弥陀仏ってなんだろう」などと思っていたことができるがあれば、テーマを発信した意味があるのではないかと思います。

先ほど教務所長より、「テーマ委員会の場ではないが議論されたかをお伝えいただければ」と、ご挨拶をいただきました。私も、せっかくこのご縁をいただいたわけですから、テーマ委員だからこそお話しできること、お伝えするべきことをお話させていただきたいと思っています。

それでは、慶讃テーマ「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」についてお話をさせていただきます。

テーマ委員会は、二〇一八年九月から二〇一九



白山 勝久氏

東京教区東京5組西蓮寺副住職、宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要テーマに関する教学委員会委員

今回の慶讃テーマを定めるにあたって、本山では「慶讃法要テーマに関する教学委員会」が設置され、6名の委員によって話し合われました。白山氏は委員として、テーマ作成に関わられました。

のだろうか？」とい
うような気持ちに覆
われて、心が満たさ
れない、気持ち落ち
ち着かない人が多い
のが現代ではないで
しょうか。そういう
意味で、現代は、多
くの人が居場所を喪

年三月まで、公式の委員会が七回、テーマ委員が自主的に集まった会が二回、そして一泊二日の合宿を一回開催しました。

五十年前の「御誕生八百年・立教開宗七百五十年」のスローガン、当時はスローガンと言っていたようですが、「生まれた意義と生きる喜びをみつけよう」。五十年間掲げられてきて、思い入れのある人も多いことと思います。その言葉に替わる新たなテーマを生み出してほしいという依頼を受けてテーマ委員は集まりました。第一回委員会で初めてメンバー六人が集まったとき、先のスローガンに替わる言葉を生み出すことに、メンバー全員が、楽しみでありつつも不安も抱えていました。

現代はいかなる時代なのか

第一回と第二回の委員会では、言葉を生み出すようにするのはなく、「現代はいかなる時代であって、何を求められている時代なのか」というようなことを話し合いました。そこから「居場所の喪失」というキーワードが出てきました。現代は、居場所を喪失している時代ではないだ

ろうか」と。住む場所がある、一緒に暮らしている人がいる、職場がある、任されている仕事がある……。そう意味では、居場所があります。でも、「私は、ここにいいのだろうか？」

「私は、こういうことをするために生まれてきた」

失っている時代ではないだろうかということが話し合いのなかで出てきました。

手を合わせる場所

帰依所、よりどころ。皆さんのお宅にはお内
仏があると思います。朝に夕に手を合わせる場
があります。家にお内仏があれば、手を合わせ
る場が生まれます。

最近のお話をさせていただきます。感染症対策で東京都内の小学校は去年も今年も遠足に出かけることができない状況にあります。そのため、私の娘が通う小学校二年生の子どもたちが、「〔近所の町探検〕」ということで去年も今年もお寺を訪ねてくれました。三クラス百人ほどの子どもたちがお寺に来てくれました。三クラスあるので密にならないように、一クラスは本堂に、一クラスはお座敷に、一クラスは境内のお庭で遊んでもらう。それをローテーションする形で案内しました。

本堂に入ると子どもたちは、「ひろーい!」と
 いて喜び、ご本尊や天女などの木彫り、親鸞
 聖人・蓮如上人・七高僧の絵を見て、「あれは

何?」「あれは誰?」と次々に質問をしてくれました。

お座敷では、若坊守が子どもたちの相手をしています。お座敷にはお内仏が安置してあります。お内仏を見て、子どもたちはいろいろと質問をしていたそうです。お内仏、お仏壇自体は、子どもたちは見たことがあるのです。でも、お家にあるかと聞いたら、無いという子がほとんどでした。最後のクラスの子たちに、「お家にお仏壇がある人?」と尋ねたら、手を挙げてくれた子は三十数人中五人ほどだったそうです。お仏壇そのものは知っているんです。おそらく、おじいちゃん・おばあちゃんのお家に行けばあるんです。でも、自分の家にはお仏壇が無い。自分の家にお仏壇・お内仏が無い子がほとんどだという現実を、小学二年生の「ご近所の町探検」をとおして知りました。

お内仏・ご本尊の前で、手を合わせたり、愚痴をこぼしたり、感謝の気持ちを口にしたり、日々の出来事を思い返してみたり・・・いろいろなことを想う場所です。子どもたちが年を重ねていくにつれ、友だちや親との関係が少し気まづくなったとき、お内仏があると無いのでは

全然違うのではないかと思っています。先ほど、帰依処、よりどころ、と言いましたが、子どもたちにとって手を合わせる場所があればいいな、そこが居場所になるんだけだな、と思います。お仏壇の購入を勧めるわけにはいきませんので、子どもたちには、手を合わせる場所があることの大切さを伝え、「またお寺に遊びに来てね」と言って、みんなを見送りました。

名前を呼ばれるということ

テーマ委員会のお話に戻します。「居場所の喪失」ということがキーワードとして上がりました。

テーマ委員会のメンバーは、僧侶が四人と門徒さんが二人です。門徒さんのおひとりとは寺田桃花さんという三十代の女性で、鹿児島島の屋久島の方です。おじいちゃん、おばあちゃんが篤信の真宗の門徒さんでした。ですから、寺田さんは、幼いころから真宗の教えに馴染みがありました。けれど、ご門徒の立場で、まだ若い寺田さんは、「聞法の歩みをされている先輩方が大勢いるのに、私なんかがこの場に居ていいのだ



広い会場で十分に間隔を空けて開催

ろうか」という気持ちで委員会に臨んでおられたそうです。

第三回目の委員会を迎える前、テーマ委員会の主査を務められている金松俊一さんから手紙が届きました。「〇〇さんのこういう言葉が大切だなと思いました。◇◇さんのこういう考え方が大事だと思います」。それまでの印象的な言葉と、名前が書かれた手紙でした。

第三回委員会が始まる際、寺田桃花さんが嬉しそうに話し出されました。「金松主査からのお手紙に私の名前があったんです。それを見て、ああ、私はここに居ていいんだーと思いました」という想いを率直に話してくださいました。

寺田さんは、「自分がここに居ていいのだろうか」という気持ちで委員会に参加されていました。出会ったばかりの人たちに、そういう迷いを吐露できる関係ではありません。でも、手紙に名前があったことによって、テーマ委員会に私が居ていいんだ、私の居場所なんだと思うことが出来ました。

皆さん、一人ひとりお名前があります。名前を呼ばれるということは大事なことです。「あなた」「おまえ」「おいっ」と言われるよりも、自

分の名前を呼ばれるとホッとするし安心もするし、呼んでくれた人に対する信頼感も生まれるのではないのでしょうか。

名前を呼ばれることが私の居場所となるという意味では、「南無阿弥陀仏」のお念仏も、阿弥陀さまが私を呼ぶ声です。私が「南無阿弥陀仏」と口にできるのは、阿弥陀さまから私への呼びかけがあるからです。「南無阿弥陀仏」と念仏申してくださいという願いが、私に届いています。私は、その願いをいただいているから「南無阿弥陀仏」と念仏申すことができるのです。私が念仏して阿弥陀さまがいるわけではありません。阿弥陀さまの呼びかけが先にあって、私が「南無阿弥陀仏」と申すことができるのです。「南無阿弥陀仏」と、私が自分の口から言うことは、自分自身の存在証明です。「南無阿弥陀仏」と念仏申すそのとき、その場所が、その境遇が、私の居場所になる。そのようなことをテーマ委員会で確かめました。

現代という時代は、居場所を喪失している時代ではないか。けれど、名前を呼ばれるということは、私の存在の証明となる。「私はここに居ていいんだ」と思える。お念仏もまた、「私はこ

こに居ていいんだ」という証。私のなかでは、第三回委員会での、寺田さんの「私の名前が書いてあったんです」という声から、テーマ委員会における話し合いが実際に動き出したように感じています。

「南無阿弥陀仏」とお念仏を申すことは、私の存在の証である。「ここに居ていいんだよ」というメッセージをテーマで表現できれば……。そのような願いが、委員会の出発点になったように思います。

テーマができるまで

六人の委員、第一回委員会での簡単な自己紹介だけでは、人となりがわかりません。先ほど、七回の公式委員会と、二回の自主委員会と、一回の合宿を行ったとお話ししました。合宿は、当初予定に入ってなかったのですが、三回の委員会を終えた後、「ざっくばらんに自分のことを話して、お互いのことをもう少し知ろうよ」ということになり、一泊二日の合宿を行いました。合宿では、テーマを生み出すことはちょっと置いておいて、委員六人が、それぞれどんなこと

を考え、これまでどんな人生を歩んできたのかを語り合いました。

合宿をとおして、それぞれの現状、それぞれの抱えている過去、それぞれの想いなど、当然のことではありますが、語り合うことでお互いのことが見えてきました。合宿後は、それまでよりは壁が低くなり、思ったことを話し合う委員会になりました。

先ほどお名前を挙げた寺田さんと、もう一人のご門徒、中山郁英さんという方がいらつしゃいました。ご門徒の二人がテーマ委員のメンバーにいらつしゃったのはとても大きかったです。僧侶の側が、今まで当たり前のように使っていた言葉を口にするとき、お二人は「それはどういう意味ですか」「今のところをもう少し詳しく説明してくださいませんか」と質問してくださいました。私たち僧侶も、それに答えようと説明するのですが、なかなか難しいものです。そういう経験は、僧侶のみなさんもあるのではないですか。そのようなやりとりもあって、当然のこととして話が進んでいくということのない委員会となりました。

第四回委員会では、それぞれにテーマ案を出

し合い、それを元に話し合いが行われました。すでに「南無阿弥陀仏」とか「お念仏」という言葉が出ていました。お念仏をはじめに大事にされたのは、主査の金松俊一さんでした。

また、結柴依子委員は、テーマ案を出し合った最初の段階で、「人と生まれて」ということを大切にしておられました。

今日のご縁をいただいて、あらためてファイルを見直して、テーマ案を出し合った最初に「南無阿弥陀仏」と「人と生まれたこと」を大事にしていたのだと気づかせていただきました。

金松主査が「南無阿弥陀仏」を大切にされていると申しました。「生まれた意義と生きる喜びを見つけよう」というスローガン、多くの方が「大切な言葉」としていただいていることと思います。

テーマ委員会といっても、六人の委員だけで密室で会議をしていたわけではありません。宗務総長、教学研究所所長はじめ、テーマ委員会に関わる本山の役職の方々が何人かおられました。

そういうなかで委員会をしていて、ほとんどの方が「五十年前のスローガンは大事だね」「大

切なメッセージだね」というようなことを述懐されていました。私は、新しい言葉を生み出すところなので、「あまり前のスローガンを大事、大事と言わないでよ」と思いながら聞いておりました。

私は、「生まれた意義と生きる喜びを見つけよう」、生まれた意義と生きる喜びを見つけるということは、実はとても大変なことなのだと思います。見つけてしまったら、しんどいものだと思うのです。このことに一生をかけようと思う。今までやってきたことを振り払ってでも専念しようと思う。そのように思えることとの出会い・・・いい出会いもあるでしょうが、悲しみを通じて出会うこともあります。生まれた意義や生きる喜びを見つけないことは、今まで生きてきたことからの方向転換を迫られることだと思います。そういう意味で、「いい言葉ですね」で済まされる言葉ではなく、大きなものに出会う言葉であると思っています。そういうことを受けとめる言葉（スローガン）であると思っています。

金松主査は、「南無阿弥陀仏」を大切にされていました。真宗の僧侶としてお念仏を届けたい

という思いが当然あります。それとともに五十年前のスローガン「生まれた意義と生きる喜びを見つけよう」という言葉をいただき、金松主査自身のこととして、「これまでの五十年の歩みの中で、南無阿弥陀仏とお念仏申す生活をとおりして、生まれた意義と生きる喜びを見つけることができたのか。もう一度自分の足元に立ち返って、そのことをたずねたいという思いがあります」と語っておられました。だからこそ、慶讃法要をお迎えするにあたり、あらためて「南無阿弥陀仏」を大切にしたいということが出発点となりました。

生まれた意義を問われたとき…

「生まれた意義と生きる喜びを見つけよう」に「意義」とあり、「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」に「意味」とあります。「意義から意味にしたことに意味はあるのですか？」と聞かれたことがあるのですが、そのことに関しては、深い考えはありません。「意義よりは意味の方が受け止めやすいかな」くらいは考えましたが、「意義ではなく意味にしよう！」という議論があつたわけではありません。ただ、「意義」にしても「意味」にしても、「生まれた意義はなんですか？」と問われたり、「生まれた意味はなんだろう？」と「どうしてこの世に生まれてきたのだろうか？」と考えたりするとき、私個人のことを思いませんか？「私の生まれた意義はなんだろう？」「私はどうして生まれてきたのだろうか？」「私は何をするために生まれてきたのだろうか？」。私個人のことを考える方が多いと思うのです。

誕生と共に生まれる関係性

私たちは関係性の中で生きています。私が生まれたということも、父と母の縁があつてのことです。父と母も、そのまた父と母の縁があつてのことです。父と母が出会う縁がなければ私が生まれる縁ありません。そして、私たち一人ひとり、ここまで育つまでにいろいろな人や物事との縁がありました。それらとの関係を経て、私は今ここにいます。

親鸞聖人は「人間」という言葉に「ひととむまゐるをいふ」（人と生まるるをいう）と左訓、

聖人なりの了解を記しています。「人間」と書いて「人と生まるるをいう」。人として生まれるということは「人間」なんだと。「人間」の「間」は関係性を表しています。つまり、人と生まれるということとは関係性を生きることだと、親鸞聖人は確認されておられます。

私たちは、「誕生」というと、ひとりの人の誕生を思います。しかし、人の誕生とともに、そこに関係性も生まれています。関係性の中に生きています。関係性を経て、今、私はここにいます。そういうことを想うと、生まれたことの意義や意味とは、私個人のことではなく、人と人との関係性を生きているなかで見いだされてゆくものだと思います。そういうことでなければ、生まれてきた意味をたずねるということになります。私個人の生まれたことの意味を問うのではなく、関係性を生きているということを見失つてはいけません。そのような思いの含まれた、「人と生まれたことの意味をたずねていこう」です。

悲しみ

合宿で、それぞれの過去が語られるなかで、

「悲」「悲しみ」ということがキーワードとなりました。如来大悲の「悲」でもあります。六人が集まって語り合いをするなかで、自分の身に起きた喜びよりも悲しみの方が話しやすいというとおかしいですが、意図せず悲しみを語る場となっていました。「悲しみ」というものは、人と人との関係のなかで重要な事柄です。

（後半）

前半は、「悲しみ」ということがキーワードとして出てきたところで終わりました。人間は関係性を生きているということを話しました。僧侶が「人間は関係性を生きている」というと、「関係性は大事ですね」「ご縁を大事に生きなければいけませんね」「絆って大事ですね」と言おうとしていると思われるかもしれません。しかし、そういうつもりはありません。関係性を生きていることは、人と人とが生きているということです。お互いが手を携えて助けあうことがあれば、傷つけあう、ののしりあう、嫌いあうということもあります。どんなに自分の中でこらえても、あるいは善い人になろうとしても、

怒りの心や悲しみの心、つらい心というものはありません。それでいいのです。それが人ですし、人と生まれたということが合わせ持つ事実です。

関係性を生きているということは、だから仲良くしましょうとか、義理人情を大切にしましょうということではないのです。人と人との関係をもつて生きているということは、支えあい助けあいということもあるし、傷つけあい嫌いあいすることもあります。そういうところを生きているのが人間です。

東日本大震災の後に「絆」という言葉が大切にされました。「絆を大切に」というような呼びかけがありました。しかし、ご存知の方も多いと思いますが、「絆」という漢字は、馬や家畜を繋ぐ道具を象（かたど）ったものです。「絆」というと、人と人との助けあいや結びつきという意味で東日本大震災のときは大切にされたのだと思いますが、「しがらみ」という意味もあります。家族との関係、ご近所との関係、職場での関係……。仕方なく一緒に物事をなさざるを得ない関係があります。そのような「しがらみ」という意味も「絆」には含まれています。

「関係性」と言ったとき、必ずしもいい関係ばかりではありません。また、いい関係を結びましょうと勧めているわけでもありません。そういうことではなくて、いいも悪いも全部ひっくるめて私たちは関係性を生きています。慶讃テーマも、念仏を称える者同士が良好な関係を結べるといった話ではありません。

一人ひとり、今まで生きてきた人生のなかに「悲しみ」があります。その「悲しみ」をなくそうというのではなく、「悲しみ」があつての私なのだという記憶も、背負っていかねればいけないことではないでしょうか。

人間は、喜びだけでは結びつけないのではなにか。「悲しみ」を持つていくという気づきによつて、人と人とは結びつくことができるのではないか。そういう話が、委員会のなかで出てきました。「悲しみ」をもつて生きているということは、人と生まれたこととして外せないことです。それは、私にとつても、あなたにとつても、同じことです。

わたしとあなたとあみだ

人間は、関係性を生きています。しかし、私とあなたの関係性だけならば、一見強固な関係でも、ちよつと事があるとすぐに関係性はグシャグシャになったり、途切れてしまつたりしてしまいます。

私たちは、阿弥陀さまからの呼びかけをいただいています。私のことも阿弥陀さまは呼びかけてくださっている。あなたのことも、阿弥陀さまは呼びかけてくださっている。私もあなたも、阿弥陀さまからの呼びかけをいただいています。「南無阿弥陀仏」の念仏を申す一人ひとりです。

そのことを思うとき、私とあなたは阿弥陀さまで結びついている三角形の関係のなかにあります。私とあなただけの線で結ばれた関係は、伸びたり縮んだり切れたりしてしまいます。安定しません。けれど、三角形でつながっている関係はつぶれません。私とあなた、そして阿弥陀さま。阿弥陀さまにとって、「この人は悪い人だから助けない」「この人は念仏申さないから救わない」とか、そういうことはありません。一人ひとりが救いの対象であり、救われるべき衆生です。そこに「南無阿弥陀仏」の普遍性がある

ります。「南無阿弥陀仏」は性別を超え、貧富の差を超え、能力の差を超え、国や宗教の違いを超え、生きとし生けるものすべてと関係を結んでいます。

先ほど、テーマ委員会にお二人の門徒さんがいらしたことが大きかったとお話をしました。寺田桃花さんと中山郁英さん。中山さんは、「私は真宗門徒ですが、教えにふれるという意味では、テーマ委員のなかで一番教えにふれていないと思います」ということをおっしゃっていました。でも、テーマ委員会で議論を重ねていく中で、「どうして「南無阿弥陀仏」が大事なんですか？」ということを探ねてくださり、「いつでも、どこでも、誰でもできるからです」というお話をしましたら、中山さんの中でストーンと落ちたらしく、「いつでも、どこでも、誰でもできる！ それはつまり普遍的なこと、世界に呼びかけられることですね」ということを感じとっていただきました。はじめは金松主査が一番推していたお念仏を、中山さんが「絶対につけるべきです」とおっしゃっていたように記憶しています。

中山さんは、「悲しみ」ということに対して

質問をしてくださいました。委員会のメンバーが、「悲しみが大事」と言うことに対して、「どうしてそんなに大事なんですか？」と尋ねてくださいました。慶讃法要を迎えるにあたつてテーマを掲げよう！ 世間・世界に訴えかけるテーマを考えよう！ とするとき、耳障りのよいテーマ、明るいテーマを考える方に走るのはないでしょうか。しかし、そうではなくて、「悲しみ」ということを大事にしたい。そういうことが委員会での話し合いのなかで出てきました。そこで中山さんからの質問になったわけです。

一人ひとりの中にある「悲しみ」を分かち合う、共有し合うことは無理なことかもしれない。けれど、「悲しみ」とは、なくそうとするものではなく、「悲しみ」も含めて私があるのではない。喜びで人と人が結びつくことは難しいけれど、悲しみで結びつくことは起こり得るのではない。悲しみがあつたがゆえに、見えてくるものがあるのではない。目を背けたい事実ではあるけれど、目を背けないところからまた見えてくるものがあるのではない。そういうことを大事にしたいのですということ

をお伝えしました。中山さんも「阿弥陀さまが、悲しみと共にある私たち一人ひとりのことを思っているのですね」と、受け止めておられました。

阿弥陀さまがいなければ、私たちは悲しみに押し潰されてしまうだけです。私とあなたという関係を結んでいるといっても、人と人との関係だけだったら、仲良く手を結んでいるときはいいいですけど、気持ちが合わなくなったときに、人と人とは簡単に離れてしまいます。でも、阿弥陀さまがいることによって、私たちは、今、帰依所を、居場所を得ることができています。

「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」という慶讃テーマは、「南無阿弥陀仏」がなくても言葉は通じるのかもしれない。しかし、「人と生まれたことの意味をたずねていこう」だけでは、阿弥陀が消えてしまいます。「人と生まれたということは関係性を生きていくということですから、あなたと私と手を取り合って生きていきましょう」ということだけを訴えるのであれば、道徳の授業という言い方はよくないかもしれませんが、大谷派が掲げるメッセージではなくてもよいのではないのでしょうか。「南

無阿弥陀仏」。私もあなたも阿弥陀さまと結びついている。「わたしとあなたとあみだ」という関係が結ばれている。「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」には、そのようなイメージもあります。

テーマ委員会において話し合われてきた、テーマに関する内容は、これくらいにしたいと思います。

御誕生と立教開宗

「慶讃法要」ということについて、思うところを少しお話しさせていただきます。二〇二三年の「慶讃法要」は、親鸞聖人の御誕生から八五〇年、立教開宗、つまり親鸞聖人が主著『教行信証』を著したところから起算しておよそ八〇〇年としてお勤めする法要です。

「御誕生」と「立教開宗」。「御誕生」はわかりますよね、親鸞聖人が誕生されたのだなど。「立教開宗」は、親鸞聖人ご自身は浄土真宗を開くという名乗りをあげていませんので、何年に立教開宗したという厳密性はありません。だから正確に八〇〇年というわけではありません。『教

行信証』内の元仁元年（一二二四年）と記載されているところでもって、真宗十派で立教開宗の年としようという取り決めをしました。

今日お話しするご縁をいただいて、あらためてテーマを見てみますと、「南無阿弥陀仏」とはつまり「立教開宗」なのかなと思います。そして、「人と生まれたことの意味をたずねて行こう」は「御誕生」。「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」というのは「立教開宗」と「御誕生」を表わしているんだなあと思いました。

さて、「御誕生」と「立教開宗」なのか、「御誕生・立教開宗」なのか。「御誕生八百五十年・立教開宗八百年」と記載されると、ふたつの出来事をお祝いすることが慶讃法要なのかなと思われるのではないのでしょうか。親鸞聖人に関するふたつの事柄を慶讃する、と。しかし私は、このふたつはひとつの出来ごとであるといただけいます。

人間親鸞の誕生は、誕生としてあります。しかし、ただ親鸞が成長していくだけでは、一人の人間の誕生と成長と死にゆくまでの物語にすぎません。人間親鸞が生涯において仏さまの教

えに出遇われ、法然上人に出遇われ、お念仏に出遇われ、阿弥陀さまに出遇われていくなかで、『教行信証』をはじめさまざまな著書を著し、教えを書き記してくださいました。そのことがあって、親鸞聖人がお亡くなりになられて七百六十年以上の月日が過ぎていますが、聖人の教えが、お念仏の教えが私たちに届いています。親鸞が誕生しただけでは、教えは今私に届いていません。親鸞のさまざまな出遇いとおして、法然上人を、お念仏を大切にして、「立教開宗」という表現にはなっていますが『教行信証』を始めさまざまな著作を残されたことがあって、今、私たちに教えが届いています。親鸞が書き記さなかったら届いていませんし、遡って親鸞が生まれてなかったら、当然お念仏の教えは私たちに届いてはいません。

教えというのは、お釈迦さまにしても法然上人にしても親鸞聖人にしてもそうですが、その人が一人そこに立って説いただけでは教えにはなりません。教えは、聞いてくださる人がいて教えとなります。お釈迦さまの教えを聞いた人びとがいるから、仏教がインドから日本にまで伝わり、法然上人の説かれた教えを聞いて親

鸞はお念仏に帰依され、よりどころとされ、お念仏を大事にされ、その教えを説かれました。

人間としての親鸞はすでに誕生していたかもしれませんが、宗祖としての親鸞聖人は、その教えを聞いた人びとがいたからこそ誕生します。「宗祖」と呼ばれることを親鸞はどう思われるかわかりませんが、教えを聞いた方がいるからこそ、私たちに教えを届けてくださった「宗祖としての親鸞聖人」が誕生するのです。そのようなことを想い、「御誕生」と「立教開宗」は別々のふたつの事柄ではなく、ひとつのことであると受け止めています。

「南無阿弥陀仏」というお念仏は、今、私にまで届いています。法然上人・親鸞聖人がお念仏を称えても、その教えを聞く人がいなかったなら、届いていません。法然上人・親鸞聖人がお念仏をされる姿を見て、この人について、この人がこれだけお念仏を信じているのだから私も信じていこうと思われた人々がいます。地獄に往く行なのか極楽に往く行なのかわからなくても、法然上人や親鸞聖人のお姿を見て、お念仏を大事にされた人びとがいます。だから今、私にお念仏が届いています。

教えを聞く私が、伝える私となる

「南無阿弥陀仏」のお念仏は、種を蒔いていることだと思えます。種を蒔くと、そのうち芽が出てきます。芽が出て、花が咲き、枯れても種を落とします。その種からまた芽が出て、次の花が咲き、その花が枯れてもまた種を生む。そのようにして植物は、ひとつの命が終わっても次につながっていきます。

それと同じように、私たちが今「南無阿弥陀仏」とお念仏申すことができるのは、阿弥陀さまからの呼びかけが大前提ですが、「南無阿弥陀仏」とお念仏申す人びとがいて「南無阿弥陀仏」が続いてきたからです。それは親鸞聖人の教えを聞いた人がいて、身をもって「南無阿弥陀仏」とお念仏申す姿を伝える人がいたからこそ、今に伝わってきています。「南無阿弥陀仏」とお念仏申すことは、私たち一人ひとりに花を咲かせて、そして一人ひとりが命を終えていった後も、私が「南無阿弥陀仏」とお念仏申したのであれば、その種がまた次の花を咲かせる。そのように次へ次へとつながっていきます。

「御誕生」と「立教開宗」の慶讃というのは、

親鸞聖人の身に起きたこと、親鸞聖人のなされたことを慶び讃えるという意味ではありません。私たち一人ひとりがお念仏を続けること、

そのことがまた次へと伝わっていく。二〇二三年にお迎えする慶讃法要は、「親鸞聖人、御誕生おめでとう!」「親鸞聖人、お念仏の教えを残してくれてありがとう!」と慶び讃えるような法要ではありません。なぜそうやって大きな法要としてお勤めするのか。それは「教えを聞いた私が、教えを伝える私となる」という大きなお仕事なのだと思います。先程申しましたとおり、念仏申す姿が伝わってきたわけですから、教えを聞いた私が念仏を称えることをとおして、念仏を伝える私となっていくます。

あらためて考えてみますと、人間は誕生して、ただ生・老・病・死を歩んで死んでいくだけではありません。出会った人びとから何かをいただき、出会った人びとに何かを伝えているわけです。それが人間、人と生まれて生きている姿です。「慶讃法要」を、親鸞聖人だけのお姿として見るのではなく、私たち一人ひとりの姿を表している法要として、二〇二三年をお迎えいた

だけだと思います。

南無阿弥陀仏のある生活

最後に、最近出会った言葉を紹介します。

この頃は、どうしたら青少年の間に布教伝道できるかということを経大問題のように思っておる人があるし、布教伝道ができないのでみすみす寺院が荒廃してくると、悲観している寺院の子弟や青年住職がおります。前途に光がないという。それは、南無阿弥陀仏がないからでしょう。南無阿弥陀仏あるところに念仏成仏ありとは、これは自然の道理であります。南無阿弥陀仏は、いくらでも子供を生むものであります。

〔ひかりといのち〕『曾我量深講義集』第十四卷

二〇六頁)

曾我量深先生はこのように語っておられます。これは昭和三十四年にお話しされているので六十年ほど前になります。

このコロナ禍で、どのご職業もそうだと思いますが、お仕事が減り収入も減っているのが現実だと思えます。お寺においても法務が減っています。布教伝道、教えを伝えていくという場であるお寺の法話会・聞法会・同朋会を休んでおられるお寺もたくさんあります。インターネットを駆使して法話の配信をしておられるお寺さんもありますが、お寺の今後について悩んでおられるお寺さんは、コロナ禍においてより増えたのではないのでしょうか。

曾我先生が、寺院が荒廃してくることとか、布教伝道ができないこと、青少年に伝えることができないことを悩んでおられる住職がおりますという問題を六十年前のお話で既にされています。つまり、布教伝道ができないという嘆きを、私たち僧侶はずっと言い続けているのです。

逆に言えば、そのようなことを六十年間も言い続けていながら、教えが続いているとも言えます。それはひとえに、お念仏を大事にしてこられた方々がいるおかげだと思います。

布教伝道をどうしようかという悩みは、僧侶の場合はずっとつきまとう問題、悩みなものかもしれません。そのような悩みを抱えているなら

ば、曾我先生がおっしゃってられる『南無阿弥陀仏』がないからでしょう』という言葉を、きちんといただかなければいけないと思います。自分のなかに「南無阿弥陀仏」を信じる心があるか。門徒さんと人との関係を結んでいるか。そういうことがないから悩んでいるのではないですか？という問題提起にも聞こえてきます。金松主査が、「南無阿弥陀仏」と念仏申すなかで、「生まれた意義と生きる喜びを見つけよう」としてきたであろうか、ということをお自分に問い尋ねていた姿と重なります。

言葉というのは、聞いた、見た、そのときは心の中にストンと来なくても、わが身に悲しみをはじめ何か事が起こったときに「ああ、あのときに聞いた話は、あのときに目にした言葉は、こういうことを私に伝えようとしているのではないか」ということにふと気づくときがあります。だから真宗では聞法を大事にします。法に聞く、教えに聞くことを大事にします。「生涯聞法だよ」ということを、お世話になった先輩僧侶や篤信の門徒さんはよくおっしゃっておられました。こういう場に集まって聞いても、そのときにはわからない、頷けないかもしれません

が、生きていくなかで「あの言葉はこのことを言わんとしていたのではないか」「私にこのようなことを伝えようとしていたのではないか」ということを気づかせてくれるものです。だからこそ「生涯聞法」なのです。

親鸞聖人の言葉に出遇われた皆様は、教えを聞き続けて、お念仏を称え続けて、伝えることが目的ではありませんが、私自身が聞法するお念仏申すことが自然と次の世代に伝わっていくこととなります。

二〇二三年に親鸞聖人の慶讃法要をお迎えするということは、教えを伝えてきてくださった方々、念仏を伝えてきてくださった方々がいることの証です。私たちが聞くこと念仏を申すことが、また次の世代へと続いていきます。その歩みが、慶讃法要をお迎えすることの大切な縁だと思っています。

コロナの収束が見えませんが、お念仏を称えることまで妨げられているわけではありません。「南無阿弥陀仏」と念仏申すことを大切にしていきたいましよう。

本日はどうもありがとうございました。



座談は意見を聞き合い、また自ら深く考えることにつながっていく

「あいあう会公開講座」を開催して

会場 富山別院本堂

五月十七日、講師に富山大学の林夏生先生、そしてLGBT当事者の方お二人をお招きし、富山別院本堂にて、「あいあう会公開講座」を開催しました。

あいあう会では、ここ数年来「性の多様性」をテーマとして学習会と公開講座を開催しています。近年、ニュース等でも「LGBT」という言葉を聞くと思います。これは、

レズビアン（女性同性愛者）

ゲイ（男性同性愛者）

バイセクシュアル（両性愛者）

トランスジェンダー（身体の性別と性自認が異なる人）

の頭文字を取ったものです。大事なことは、これらの人々は「自然に」そうなっているのであり、趣味でも病気でもないこと。そして本人の意思で変えることもできない、ということ。人間の性のあり方は実はとても多様であり、全員が「自分の望む生き方」を持っているのです。

以下は、参加レポートです。



富山教区解放運動推進協議会 佐伯 由加利

自分には関係ない。知らないから。とかで何でもスルーするのではなく、だからこそ足を運んで「問う」ことを課題にしていたきたい。

今回は、当事者のお二人にも参加していただき、生の声を聞かせていただきました。

今、私たちはどうしたらいいのでしょうかと尋ねましたら、自然に、そしてありのままの私を受け入れてくれたらいいと言われました。

何か、今の私たちの学びと重なるものを感じました。みんな差別や偏見なく、風とおしのいい社会になれば、皆が楽になれるのだなあと感じました。まずは知ることからはじめたいと思います。

富山教区同朋総会を開催して

会場 富山国際会議場

五月十二日、富山国際会議場にて教区教化委員会組織拡充小委員会が主催となり、「富山教区同朋総会」を開催しました。

講師に「慶讃法要テーマに関する教学委員会委員」である白山勝久委員（東京教区）をお招きし、慶讃法要テーマが定められるまでの経緯を中心にお聞きました。

お話の中で特に印象に残ったのは「居場所」という言葉が委員会発足当初に話し合われていたということです。居場所とは「安心していられる場所」、「そこにおいてよい場所」。「南無阿弥陀仏」と称える場所が、そうした居場所であってほしいという願いが込められているのかもしれない。

また、座談会ではテーマとそれぞれの生活の課題を照らしあいながら、和やかに深く話し合い、様々な意見感想を聞くことができました。

前回の慶讃法要テーマ「生まれた意義と生きる喜びをみつめよう」には、その後五十年にわたって同朋会運動のなかで私たちをお育ていただいたが、新たなテーマもそのようになっていくのではないかと思います。

富山教区教化委員会 組織拡充小委員会幹事 石川 正穂

「社会問題研修会」を開催して

会場 ① 富山東別院会館 ② 十三組 勝蓮寺

【二〇二二年六月二日】

六月二日、講師に臨床心理士・大谷大学名誉教授の佐賀枝夏文先生をお迎えして、社会問題研修会「不安を生きるヒント〜コロナを縁として〜」を開催しました。

今回は、教区としては初めてインターネット中継を利用した二会場同時開催を試みました。中継会場の参加者の方々からの反応も上々で、これまで長年の課題であった「教務所ばかりが会場になって、遠くの人は行きづらい」という問題に対して、大きなヒントを得ることができました。感染症対応の視点から参加者分散の効果もあり、かつ一カ所で開催するよりも合計参加者は多くなり、まさにいいこと尽くめでありました。

以下、参加した社会教化小委員会委員からの報告です。

△会場1 富山東別院会館▽

不安を生きるヒントをテーマに、講師佐賀枝

夏文さんに、心についてお話していただきました。私たちはどんな小さなことでも思い通りにならないと腹が立ち、心が傷ついた原因を排除しようとする。佐賀枝さんは一度傷ついた心は元には戻らない、そこからどう自分の心と対話していくのか、どう人生をプラスに変えていくのか……。そんなお話をニコニコと優しい語り口で話される印象が強く残った講義でした。なんのせ（とにかく）、かわいらしい！ カウンセラーネームは「サザエさん」というだけはありません。心をほっこりさせたい方は、ぜひ一度お話を聞いてみてください、おすすめです。

第十一組 無量寺 竹澤 祥瑞

△会場2 第十三組 勝蓮寺▽

今回の研修会はインターネット中継による講義であった。初めての体験であったが、映像・音声ともにハッキリしておりわかりやすく、こんな法話の方法もあったかと感心した。

講義の内容は二つに分けてあり、まず、今、世の中はコロナ自粛生活の中で個々が不安と悩みの日常であるが、これは生きている証であるから、頑張らないで不安や悩みと共に生きることということだった。第2話は、カウンセリン

グ手法で受講者自身の心を絵で表現し「このころの原風景」を描くことにより、このころのふるさとはいつでも戻ることの出来るところと自覚して生きていくという教えであった。暮らしの中に、不安と悩みの尽きない毎日であるが、いかに自分自身の心をおさめていくかが肝要であると気づかされた講義であった。

二会場開催で、地元しながら富山市の法話が聞けて良かったという声が多かった。今後も続けてほしいものである。

第十三組 雲龍寺 門徒 蓬澤 正二



新宗教に関する研修会を開催して

【二〇二一年六月十八日】
会場 富山東別院会館

六月十八日、新宗教に関する研修会を開催しました。富山教区では五年前から毎年、この研修会を開催しています。毎年少しずつ内容を変えてきましたが、今回は原点に帰ってこの研修会を始めるきっかけとなった事件に関する団体を中心に学びました。

会場の人数制限の問題もあって大々的な宣伝をしませんでしたが、十四名の方が参加してくださいました。来年度も同様の内容とし、インターネット中継によって複数の会場をつないで同時に開催しようと計画しています。

以下は、参加レポートです。

●これまで身近なところや、上市町の浄土真宗本願寺派寺院の他宗教への譲渡や様々な新宗教に関する報道は聞いてはいましたが、具体的な中身に関する知識も乏しく、門徒さんから聞かれたりしても「お東とは違うんよ」程度の返答しかできないことが参加のきっかけでした。

●新宗教団体の、時代社会への適応能力の高さ、

情報発信の手法は見習うべき点も多く、新宗教に惹かれる理由として親身になって話を聞いてくれる。学びたい気持ちや問いに答えてくれるということが印象に残りました。これらは僧侶としてとても大切なことですが、果たして自分が出来ているか？と自身の姿勢について考えさせられました。新宗教に関する知識もですが、それ以上に有縁の方との対話、教えを求める人たちと新しく出遇う活動の大切さを学ぶことが出来ました。

第十組 正覺寺 犬島 久世



瓜生先生から、新宗教やカルトについてのわかりやすいお話

「解放運動推進協議会公開講座」を開催して

【二〇二一年六月二十九日】
会場 富山別院本堂

このテーマを与えられなかったら、考えてみることもなかった「業」「宿業」という問題でした。戸次公正先生からはたくさん資料を事前にいただいていたのですが、どれも難解で、私には絡まった糸のようでした。先生は、「あなたは本当に聞いていますか」「あなたは自分の頭で考えていますか」と、資料を読むときも「聞思」ということを意識しなさいと熱く語られました。そういうわけで、的外れを承知で、私も自分の言葉で考えてみました。わたしは「宿業」という考えは、私たちが生きていく上でとても大切なものなのではないかと思いました。「どうして私は私なんだろう」「なんで私が」「なんであんなに」という、様々な問題に直面したとき、「あなたはあなたであっていい」「私は私を生きていい」という、人間の存在の深い所からの声が聞こえてきそうな気がするのです。



第十二組 敬恩寺 轡田 映子

お寺紹介

梅澤持専寺 (富山市小見)

今回は第十組持専寺さんを紹介します。



梅澤持専寺本堂

梅澤持専寺の由緒より

慶長二年（一五九七年）七月六日、本願寺東西分派に反対運動した罪により、持専寺十代の正宗坊が浄慶坊（青木信蔵）と共に、富山のいたち川原で斬首獄門にされる。正宗坊には長男善宗と次男祐正という子がいた。二人は夜陰に乗じて、晒し首と持専寺の掛け軸を持って立山山麓の小見の地に逃げてきた。首を畑地に埋め、草庵を建てて菩提を弔って来た。長男の善宗が小見の梅澤持専寺を再興したのです。

慶長二十年（一六一五年）教如上人の子、宣如上人から小見の持専寺に授与された、親鸞聖人の御真影（裏書き付）と蓮如上人の絵像が現存しています。

今でも、毎年七月六日には首塚前でお勤めし、本堂で法話をしています。

※次男の祐正は、生地村の専念寺に入寺し寺を栄えさせた中興の人であると記されてあります。



宣如上人から授与された御真影



正宗坊首塚

仏事について日常の疑問

～ 編集委員座談より～

日々の法務の折に、ご門徒の方々から様々な質問をお受けいたします。

そのような質問について、前回に引き続いて『如大地』編集委員で話し合いをしました。

今回は『分骨』についてを掲載します。



分骨はしなければいけないのですか？

司会 分骨について、どのような現状が見受けられますか？

委員 A 最近では本山へお骨を持っていかない人が増えています。大きい骨つぼを四十九日でお墓に納骨して、小さい骨つぼをどうするかは家庭によって違いますね。お内仏の中に何年も置いている家もありますよ。

委員 B 真宗本廟収骨はこのところほとんどないですね。あっても大谷祖廟納骨ばかりです。また京都へは行かず、お手継ぎのお寺や地域の納骨堂に納める方もいらっしやいますね。

委員 C 自坊は敷地内に納骨堂があるので、希望があれば受けています。ただ、納骨して終わりと云うか、その後継続的に納骨堂へお参りに来られる方は少ないです。

委員 D いろんなお寺を見ていると、最初の一、二年くらいはお参りに来ていたところがある

多いですよ。

委員A 納骨すること自体が供養だという考えがあるのではないだろうか。納骨をご縁に門徒としての歩みを始めたいというよりも、納骨したという既成事実になんて思っているように感じます。前回の座談にあった何回忌まで法事をやればいいのかというのと同じで、ここまでしたからもういいだろうという自分都合で終わっているような気がします。

委員B そもそも、お墓に納骨して、残りを本山などに分骨するというシステムそのものを知らない人が増えたと思いますよ。お骨を分けないで一緒にお墓に納めたいという声も多くなっています。

委員A 根本的な問題として、分骨の意義が分からないということがあります。だからわざわざ本山まで行って収骨する必要はないと思われるのではないだろうか。昔のようになかなか旅行に行けない時代なら、納骨をご縁にして京都旅行ができるという動機もあったでしょうが、今では海外でもどこでも旅行先の選択肢がある中で京都に行くということが少なくなってきたのかもしれない。

委員E 今まで多くの方々が本山へ分骨されたのは「これまで親鸞聖人の教えを聞いて生きてきた。亡くなった後も親鸞聖人の側で教えを聞き続けたい」という、故人や家族の思いがあったからだと思います。本山収骨は門徒と本山をつなげてくれる大切なご縁だと思います。そのように考える人とここにお骨があっても困るのでどこかに収めたいという人とは分骨に対しての意識が全く違いますよね。

司会 私は京都に納骨していた人が多かった時代を経験していません。なぜ近場のほうが手軽でいいという人が増えていったのか気になりますね。

委員A そうなった要因は、お寺の方も分骨をする意義等をきちんと伝えられていなかったのかなと思います。社会の変化や個々の家庭の状況等いろんな問題が複雑に絡んでいると思いますが、小手先のことをやるより地道にお伝えていくしかないと思います。

司会 みなさん、門徒さんに分骨を積極的に勧めていますか？

委員D 勧めています。門徒さんには本山収骨、



おかみそりを勧めます。帰敬式を受式していただく良いきっかけにもなっています。

委員B 私は積極的には勧めずに聞かれたら答えるようにしています。費用がかかることなので、強制している印象を与えたくないからです。

委員D ある寺院では高齢で京都に行けないという人たちのために、住職が代理収骨をされていると聞いたことがあります。これは健康面や金銭面の問題に対する手立てですが、一番大切なのは精神的な距離感があるかどうかですね。

委員C 他教区では教務所が収骨の代行をしているようです。富山でもコロナ禍で個人での上

山が難しいということで、門徒さんから同じような要望があったと聞きました。

委員E 代行に関しては、親類家族同士のつながりや寺と当家とのつながりが希薄になるのではという問題点もあります。また、単にお骨だけ収められればいいということではなく、自身が身を運ぶことによって収骨の意義を確認することが大切で、納骨代行の要望に応えることで、かえって収骨の意義が分らなくなるのではないかと思います。

委員D 私の祖父の代までは団参をしていました。門徒さんを大勢連れて本山に納骨していたようです。自分たちだけだと行きづらいですが、お寺さんが日取りを決めて引率してくれるということで参加しやすかったでしょう。本山にお参りした後、観光地を訪れていました。

委員C 団参であれば、移動中に分骨の意義についてお話しすることもできますね。

委員B それなら教区や組でも企画できそうですね。真宗本廟収骨、大谷祖廟どちらでも分骨の意義が分からなかった人にも伝えることができ、理解していただけるようになるかもしれません。

れません。

委員E 相統講制度がはじまって、本廟護持の精神のもと、次の世代がお参りするかしんないか関係なく収められてきました。本山から遠いか近いとか関係なく全国のご門徒さんには本山収骨して本廟を護持するという精神があり、その精神をきちんと住職が門徒に伝えていたと思います。収骨団参で行った場合、みんなでお参りして共有した経験をのちに語り合うなどし、本山だけでなくお寺にもきちんと参らないといけないという考えにもつながっていったのではないのでしょうか。

司会 ここまで分骨について各自の思いを話し合ってきましたが、「分骨はしなければいけないのですか」という問いに対する答えは出しましたか？

委員C 分骨しなければいけないとか、分骨しなくてもいいということではなく、分骨の意義や願いを知ることが今回は重要でしょうね。

委員E 昔は交通機関も不便な中で本山収骨をされた方々の思い、法義相統をしつかり伝えていかなければならないと思います。時代背景が

違っても何を大切にし、それをどのように伝えていくのかを問われているのではないのでしょうか。



「分骨はしなければいけないとか、分骨をしなくてもよい」といった結論を導き出すものではなく、大切なのはその意義を考えることです。まずは私たち一人ひとりがそこに立ち返り、ご門徒さんに伝えていくことから始まります。昔の人たちはなぜ大変な苦勞をしてまでも、本山へお参りして収骨をしていたのか。その思いを馳せることで自分自身に何が問われているのか、何を説いていくべきなのかが見えてくるのではないのでしょうか。

新コーナー

書籍紹介

編集委員がこれまで読んだ本の中で、心に残った本を紹介していきます。



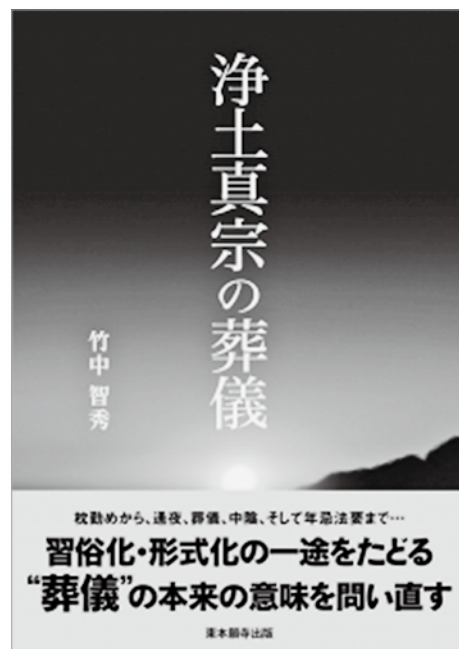
親鸞の「いのちの歌」正信偈入門

古田 和弘 著 東本願寺出版 1,320円

ご門徒の方に「正信偈の法話をしてほしい」「普段お勤めしている正信偈の意味を知りたい」と言われることがあります。そこで、もう一度正信偈を勉強しようと思いこの書籍を読みました。

著者の古田和弘氏はこの書籍の中で正信偈について一語一句を丁寧に解説されています。この書籍の中には原文に対しての意識もあるのですが、正信偈の「ところ」を伝えたいという思いからこの書籍の作成に至ったことが語られています。そういった意味で正信偈は偈文という詩の形式にしつつも、その中に経典や七高僧の論説の箇所を受けて書かれているという解説が丁寧にされています。正信偈を通して聖人の大切にされたものを知る、そのような印象を受けた書籍でした。

(大伴慎介委員)



浄土真宗の葬儀

竹中 智秀 著 東本願寺出版 1,540円

この本は、2005年に福井教区で行われた竹中智秀先生（大谷専修学院院長・当時）の講義録です。この本の帯に「習俗化・形式化の一途をたどる“葬儀”の本来の意味を問い直す」とあるように、浄土真宗の葬儀について丁寧に話されています。葬儀や法事など仏事の本来の意味が分からなくなり形骸化しているとも言われますが、もう一度真宗の葬儀・仏事について考えてみるきっかけになる一冊だと思います。

(華蔵閣行文委員)

教区だより

(敬称略)

宗派経常費

完納御礼

二〇二〇年度宗派経常費を御完納いただき誠にありがとうございました。ここに完納寺院を、ご披露申し上げ、御礼にかえさせていただきます。

(二〇二〇年七月一日～二〇二一年六月三十日)

第九組

西光寺^{若屋} 光圓寺^{長沢} 中堂寺 寶林寺
寶堂寺 永源寺 西圓寺 善通寺 禮行寺
速成寺 本覺寺 護念寺 深妙寺 樂圓寺
慶正寺 尊光寺 康樂寺 圓龍寺 長光寺

第十組

圓命寺^{大島} 正覺寺^{見義} 覺證寺 聞成寺 蓮照寺
福恩寺^{今渡} 正覺寺 永福寺 應聲寺 慶念寺
專福寺 專琳寺 満念寺 永宗寺 善久寺
長龍寺 極性寺 常念寺 覺順寺 正源寺
善教寺 善性寺 徳蓮寺 寶藏寺 報光寺^{米田}
養願寺 本行寺 了照寺 蓮光寺 專福寺
西元寺 浄光寺 乘善寺 長福寺 唯見寺

第十一組

傳長寺 持專寺 念法寺 誓願寺 真行寺
勝光寺 真成寺 西源寺 照念寺
稱永寺^{田中} 真證寺 專廣寺 養照寺 專入寺^{太田}
西光寺 廣際寺 本廣寺 教正寺 西光寺
光念寺 善行寺 入覺寺 正樂寺 佛念寺
立剋寺 圓照寺 竹願寺 光徳寺 玉永寺
善覺寺 正專寺 稱念寺 浄誓寺 光顯寺
圓満寺 本敬寺 松林寺 願行寺 西養寺
真敬寺 圓常寺 浄信寺 無量寺 浄恵寺
等通寺 光明寺 正恩寺 常念寺 照光寺
願成寺 祐教寺 岩隆寺

第十二組

託法寺 神久寺 圓覺寺 常念寺 長圓寺
常德寺 圓乘寺 光曉寺 勝樂寺 唯信寺
榮明寺 安成寺 照善寺 敬恩寺 專正寺
眞宗寺 相順寺 大徳寺 常願寺 得性寺
勝福寺 則善寺 佛現寺 願宗寺 正信寺
光徳寺 得念寺 西照寺 長樹寺 願樂寺
明喜寺 浄永寺 本傳寺 辻徳法寺 明源寺
心行寺 長安寺 善念寺 長寶寺 願蓮寺
願生寺

第十三組

樹徳寺 養照寺 明願寺 專徳寺 浄慶寺

住職就任

(二〇二一年一月一日～六月三十日)

二〇二一年五月二十八日

第十一組 圓照寺 松倉 麻子

第十組 長福寺 池田 周邦

二〇二一年六月二十八日

第十二組 本傳寺 渕上 知明

第十組 長龍寺 篠川 弘一

教師入位

(二〇二一年一月一日～二〇二一年六月三十日)

二〇二一年三月十八日

第十一組 圓照寺 松倉 麻子

二〇二一年三月十九日

第十組 福恩寺 加藤 悠義

第十二組 託法寺 華藏閣 行暉

教区役職者の改選

① 参議会議員

(任期 二〇二二年五月一日～二〇二四年四月三十日)

松本 弘行 (第十組 長龍寺)
野澤 一成 (第十一組 願行寺)

② 正・副組門徒会長

(任期 二〇二二年三月十日～二〇二四年三月九日)

第九組 会長 丸山 忠正 (西光寺)
副会長 平野 專作 (圓龍寺)
副会長 清水 善藏 (禮行寺)

第十組 会長 松本 弘行 (長龍寺)
副会長 早水 信弘 (真成寺)
副会長 飯野 勝 (善性寺)

第十一組 会長 野澤 一成 (願行寺)
副会長 三輪 隆 (称念寺)
副会長 花岡 英造 (等通寺)

第十二組 会長 平野 俊二 (本傳寺)
副会長 寺口 則康 (勝福寺)
副会長 飯村 滋 (長安寺)

第十三組 会長 島端 正昭 (長願寺)
副会長 草原 庄一 (光泉寺)
副会長 瀧 芳維 (持專寺)

③ 教区門徒会員

(任期 二〇二二年四月一日～二〇二四年三月三十一日)

第九組

丸山 忠正 (西光寺) 教区門徒会会長
平野 專作 (圓龍寺) 教区門徒会常任委員
清水 善藏 (禮行寺)

第十組

松本 弘行 (長龍寺) 教区門徒会常任委員
早水 信弘 (真成寺) 教区門徒会常任委員
飯野 勝 (善性寺) 常任委員補充員一

第十一組

野澤 一成 (願行寺) 教区門徒会常任委員
三輪 隆 (称念寺) 教区門徒会常任委員
花岡 英造 (等通寺)

第十二組

平野 俊二 (本傳寺) 教区門徒会副会長
寺口 則康 (勝福寺) 教区門徒会常任委員
飯村 滋 (長安寺)

第十三組

島端 正昭 (長願寺) 教区門徒会常任委員
草原 庄一 (光泉寺) 常任委員補充員二
西村 義人 (光誓寺)

富山別院

若林 啓介

④ 教区監事 (教区内門徒より一名)

金尾 誠一 (第十組 蓮光寺)

⑤ 『如大地』編集委員

(任期 二〇二二年七月一日～二〇二四年六月三十日)

藤田 徹 (第十二組 勝樂寺) 委員長
砂谷 知昭 (第十一組 專入寺) 副委員長
庭田 龍信 (第十二組 長安寺) 副委員長
耳浦 修 (第九組 速成寺)
安川 潤 (第九組 光圓寺)
堀 瑞子 (第十組 蓮照寺)
海野 絵里 (第十組 真成寺)
蛭川 俊治 (第十一組 專廣寺)
大伴 慎介 (第十三組 持專寺)
寺内 真 (第十三組 真友寺)

『如大地』編集委員からのメッセージ

編集委員改選にともない、退任するにあたっての感想。新委員より就任にあたっての抱負などメッセージを掲載します。

【退任にあたって】

・気がつけば、十年以上『如大地』に携わってきました。ある意味、私自身、『如大地』に成長させていただきました。本当にありがとうございます。 島倉 慶晃

・なかなか出席もできず、提出も遅れ、委員の皆さんにご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。それでも『如大地』編集委員として、不真面目時々真面目と、自分なりの視点から楽しく関わらせていただき、委員も読者も、

性別・年齢がバラバラの中で、支え？支えられながら貴重な経験をさせていただきました。本当にありがとうございました。
高山 芳樹

・一期三年間、編集委員とおして真宗の教義や習わしを学ばせていただきました。この経験をさせてもらったご縁に感謝いたします。
杉森 達朗

・講義録の文字起こしには苦労しましたが、お話を聞きながら文章化していくので自身の学習になりました。ありがとうございました。
館 純朗

・このたび、五期務めました編集委員を退任することとなりました。当初は一期限りでやめるつもりでしたが、当時の主事さんから「もう一期やりませんか」と声をかけていただいたのがきっかけとなり、編集委員を続けることにしました。編集作業とおして、私自身様々な勉強をさせていただきました。この経験がなかったら、今の私はないと思います。『如大地』に育てられたという思いもあり、『如大地』に対して強い思いを持っておりま。当時の主事さんには本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

編集作業には熱心に取り組んできました。少しでも良いものを作ろうと、全力を尽くしました。ただ、ある方から『如大地』の編集に対して否定するようなことを言われたことがあります。何を根拠にそのようなことを言われたのかは定かではありませんが、以降さらに熱を入れて取り組んできました。

新しい編集委員会の皆さんには、どうかきちんとしたものを仕上げるように編集作業に取り組んでいただきたいと思います。そして、今までの枠にとらわれず、いい

企画があればどんどん取り入れていってください。

まもなく『如大地』は一五〇号という節目を迎えます。これまでの歴史の重みを大切にしながら、常に新しいものに取り組む『如大地』が発行され続けることを願ってやみません。
華蔵閣 行文

・短い期間ではありましたが、『如大地』編集委員となり、これまで総代、責任役員の方々から寄せられていた要望等について、発言する機会を得られたことに感謝いたします。次期の委員さん方には、門徒さんからの意見を大切にしながら紙面づくりをお願いしたいと思います。ありがとうございました。
小原 秀範

・以前に一度『如大地』の編集委員をやったことがありました。その時は、無事に終わってやれやれと思いました。第九組は人が少なく、また編集委員をすることになりました。よろしくお願いします。
耳浦 修

・十数年ぶりに『如大地』編集委員を仰せつかりました。当時とは社会背景も教区の状況も大きく違ってきています。教区改編も進行中で、これからは『如大地』の役割や在り方が大きく変わってくるのではないかと思います。責任の重さを感じていますが、微力ながら、少しでも貢献できたと思います。よろしく願いいたします。
安川 潤

・学生時代は国語の成績が一番悪く苦労した私に編集委員が務まるのか不安ですが、三年間頑張りたいと思います。
堀 瑞子

・初めて編集会議に参加して校正、編集の大変さを知るこ

とができました。『如大地』に携われることをありがたく思っております。三年間よろしく願いいたします。
海野 絵里

・引き続きの委員就任となります。今後とも編集会議や作業を通じて学ばせていただきたいと思います。
蜷川 俊治

・早いもので二期、六年『如大地』編集委員をやらせていただきました。再度編集に携わらせていただきます。よろしく願いいたします。
砂谷 知昭

・このたび、三期目となります。教区の広報誌としてこれまで『如大地』の編集委員をやってきましたが、教区の皆様には、具体的に読みやすい文章を目標としてきました。今後もそれを忘れることなく、職務にあたりたいと思います。
藤田 徹

・二期目になります。これまでの三年間に先輩方から教えていただいたことをしっかり引き継いで、魅力のある紙面づくりをしていきたいと思っています。
庭田 龍信

・諸先輩方と共に楽しく務めさせていただいております。今回も続けさせていただきます。皆様の感想もお待ちしております。
大伴 慎介

・組長から依頼があり、簡単に返事をしてしまいましたが、第一回の編集会議に出席し、大変なところに来てしまったと、すごく後悔しています。しかし、これをきっかけに周りの皆様から様々なことを学べればと思っています。
寺内 真

教化日誌

(二〇二一年一月一日～六月三十日)

1月

- 1日 初参り・初鐘の集い
 14日 『如大地』編集会議
 15日 ご命日のつどい【長澤秀豊輪番】
 20日 第十一組組会・門徒会合同会
 22日 あいあう会
 25日 解放運動推進協議会
 26日 第九組組会

2月

- 1日 第十二組組会
 2日 第十組組会
 3日 新教区準備委員会「財務小委員会」
 4日 査察委員講習会
 8日 第十二組組門徒会
 9日 第十三組組会
 10日 共学研修会【佐野明弘氏】
 15日 教区教化委員会「社会教化小委員会」
 御命日のつどい【桃井量純氏】
 第九組組会

3月

- 2日 新教区準備委員会「財務小委員会」
 8日 あいあう会
 9日 教区教化委員会「組織拡充小委員会」
 19日 第十三組組門徒会
 22日 解放運動推進協議会
 25日 『如大地』編集会議
 26日 あいあう会

- 10日 教区教化委員会「青少年教化小委員会」
 11日 東日本大震災「わすれな鐘・追弔法要」
 12日 教区教化委員会「ホームページ委員会」
 13日 教区教化委員会「社会教化研修小委員会」
 15日 御命日のつどい【野田博俊氏】
 奉仕研修会

4月

- 1日 真宗本廟「春の法要」(～4日) ※ライブ配信
 4日 真宗本廟お待ち受け大会記念講演会 ※ライブ配信
 5日 真宗本廟お待ち受け大会 ※ライブ配信
 6日 『如大地』編集会議
 7日 新教区準備委員会「財務小委員会」
 8日 富山別院教化委員会「企画会」
 12日 富山別院教化委員会
 13日 坊守会聞法講座【水島 聡氏】
 15日 御命日のつどい【月光 真氏】
 秋安居(～16日)【田代俊孝氏】
 19日 あそび環境研修会【北島尚志氏】
 20日 あいあう会
 21日 教区門徒会「臨時会」
 22日 解放運動推進協議会
 30日 富山別院責任役員会

5月

- 1日 五一会(教区内物故住職追思法要)
 7日 富山別院院議会

- 11日 新教区準備委員会「財務小委員会」
 坊守会聞法講座【水島 聡氏】
 12日 教区同朋総会【白山勝久氏】
 13日 教区教化委員会「門徒研修小委員会」
 15日 御命日のつどい【星川 了氏】
 17日 あいあう会「公開講座」【林 夏生氏】
 18日 教区教化委員会「寺院研修小委員会」
 19日 高岡教区・富山教区青少年意見交換会
 20日 新教区準備委員会「別院協議会」
 26日 教区教化委員会「社会教化小委員会」
 29日 十三組同朋大会【茂利眞正氏】
 31日 あいあう会
 解放運動推進協議会

6月

- 1日 教区教化委員会「青少年教化小委員会」
 2日 社会問題研修会【佐賀枝夏文氏】
 3日 新教区準備委員会「教学・教化小委員会」
 共学研修会【佐野明弘氏】
 4日 新教区準備委員会「教学研鑽機関検討委員会」
 6日 第九組同朋大会【藤原正寿氏】
 8日 教区教化委員会「組織拡充小委員会」
 教区改編委員会
 9日 『如大地』編集会議
 10日 第十組同朋大会【日野賢之氏】
 11日 教区同朋の会「報恩講」【鷺尾祐恵氏】
 15日 御命日のつどい【見義智証氏】
 第二回新教区準備委員会
 16日 解放連「総会」【岡西法英氏】
 17日 新教区準備委員会「別院協議会」
 18日 新宗教研修会【瓜生 崇氏】
 19日 第十一組同朋大会【池田勇諦氏】
 23日 第十二組同朋大会【瓜生 崇氏】
 25日 教区教化委員会「総会」
 28日 教区坊守会「総会」
 29日 あいあう会
 解放運動推進協議会「公開講座」【戸沢公正氏】

教務所 人事異動

【退職】

二〇二二年六月三十日付

長澤 秀豊

定年により役務を免ずる

【着任】

二〇二二年六月三十日付

北島 昭彦

高岡教務所長に任命する

富山教務所長の兼務を命ずる

富山別院輪番の兼務を命ずる

富山教区高岡教区 教区改編統括教務所長を命ずる

退任のご挨拶

長澤 秀豊

富山教区の皆様方におかれましては、教区教化テーマ「なむあみだぶつ」を訪ねませんか? のもと、教区教化事業・教区運営及び富山別院に対しまして平素よりご理解ご協力を賜り誠にありがとうございます。さて、教化テーマに込められた願いをいただいております。と、訪ねるという内容には、自らの課題が浮き彫りにされてくるということがあります。課題を抱える中に「問い」が連続して起こってくるのだと思います。各御寺院の護持運営はとても大切なことであります。しかしながら、地域を取り巻く状況も人々の生活も変わり続けています。これまで通り、今まで通りで、歩んでいくことが果たして出来るのでしょうか。先般の教区同朋総会にお

いて、慶讃テーマ「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」についてテーマ策定委員より趣旨提言を受け、座談会が行われました。人と生まれたことによつて、「人間関係を生きる身となる」ということと反面「人間関係によつて絆が断たれてしまう」又は「人が疎外される」ということがあるとの意見もあり、そのことも課題としてこの身に起こつてまいります。あらためて「なむあみだぶつ」を訪ねる営みをいただきます。まだまだ新型コロナウイルス感染症拡大に対策を講じる必要がありますが、仏事・法座・文章伝道等や新たな方途により共に教えを聞く場を護り続けてまいりたく痛感いたしております。

教区改編につきましては、富山・高岡教区とで、既にお知らせいたしております合意事項に基づき、昨年度「新教区準備委員会」を発足し、各委員会において鋭意協議を重ねております。宗門・教区・組・寺院を取り巻く現状を見据え、将来に渡つて真宗の教えが連綿として受け伝えられていく場を、今、いる私たちが表現していかねばならないときを迎えております。今後とも各位のご協力・ご理解をお願い申し上げます。

私儀

このたび、六月三十日付にて、富山教務所長並びに富山別院輪番を定年により退職いたしました。在職中におきましては、教区内各位に多大なるご尽力・ご指導を賜りましたことは誠に有難く、何よりも代えがたいものでありました。重ねまして心より感謝申しあげ退任のご挨拶とさせていただきます。

着任のご挨拶

北島 昭彦

富山教区の皆様におかれましては、常日頃より法義相続・本廟護持にご尽力を賜っておりますこと厚く御礼申し上げます

このたび、六月三十日付にて高岡教務所長兼富山教務所長、富山別院輪番を拝命いたしました。富山教区へは二度目の着任であり、一度目は二〇〇三年七月から三年四カ月、主計としてお世話になりました。そして、このたびは教務所長としての初任地となりました。私にとりましては、初めての役職での着任が二度も富山教区であり、大変なご縁を頂戴いたしましたものと思っております。前任地の東京教務所では主計、次長として合わせて約五年九カ月間、教化事業の推進に携わらせていただきましたが、最後の一年間はコロナ禍における教化事業は一体何が出来るのか、教区の方々と悩みながら、試行錯誤しながらの日々でありました。

富山教区におかれましては、教区、組、ご寺院での活動は大きな影響を受けたものと存じます。そのような中において、富山教区として宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要に向けた取り組み、間近に迫っている教区改編、年明けには第四回門徒戸数調査の実施など、皆様とともに教化事業の推進並びに宗務改革に向けて精進してまいりたいと存じます。

何卒、皆様方のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

解散寺院

(二〇一九年一月一日～二〇二二年六月三十日)

二〇一九年一月十四日	第九組 願念寺	清算終了(寺籍削除)
二〇一九年二月八日	第十三組 淨圓寺	清算終了(寺籍削除)
二〇一九年五月三十日	第十二組 法潤寺	清算終了(寺籍削除)
二〇一九年六月五日	第十組 榮正寺	清算終了(寺籍削除)
二〇一九年六月五日	第十一組 一乗寺	清算終了(寺籍削除)
二〇一九年九月十八日	第十組 善立寺	清算終了(寺籍削除)
二〇二二年一月二十五日	第十二組 巧照寺	清算終了(寺籍削除)
二〇二二年二月二十六日	第十組 明休寺	清算終了(寺籍削除)
二〇二二年五月二十日	第十一組 光蓮寺	清算終了(寺籍削除)
二〇二二年五月二十五日	第十一組 淨教寺	宗派承認
二〇二二年六月二十一日	第十組 淨林寺	宗派承認
二〇二二年六月二十二日	第十二組 宗琳寺	清算終了(寺籍削除)
二〇二二年六月三十日	第十二組 妙教寺	清算終了(寺籍削除)

書籍のご案内

本年度、新たに左記書籍を購入いたしました。
既存の書籍とともに閲覧及び貸出が出来ます。ご利用ください。

図書名	著者名	発行元
紙芝居『ブッダ』おしゃかさまの一生「前編」		仏教伝道協会
紙芝居『ブッダ』おしゃかさまの一生「後編」		仏教伝道協会
『月刊 住職』		興山舎
別院探訪		東本願寺出版
法話のきほん	伊藤 恵深	法藏館
教行信証化身土巻講義第一巻		
儀式作法の心得		大阪教区教化委員会

敬 弔

ご生前のご功労を偲び、
謹んで哀悼の意を表します。

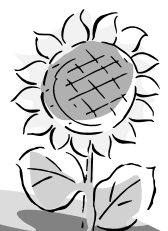
(二〇二〇年一月一日～六月三十日)

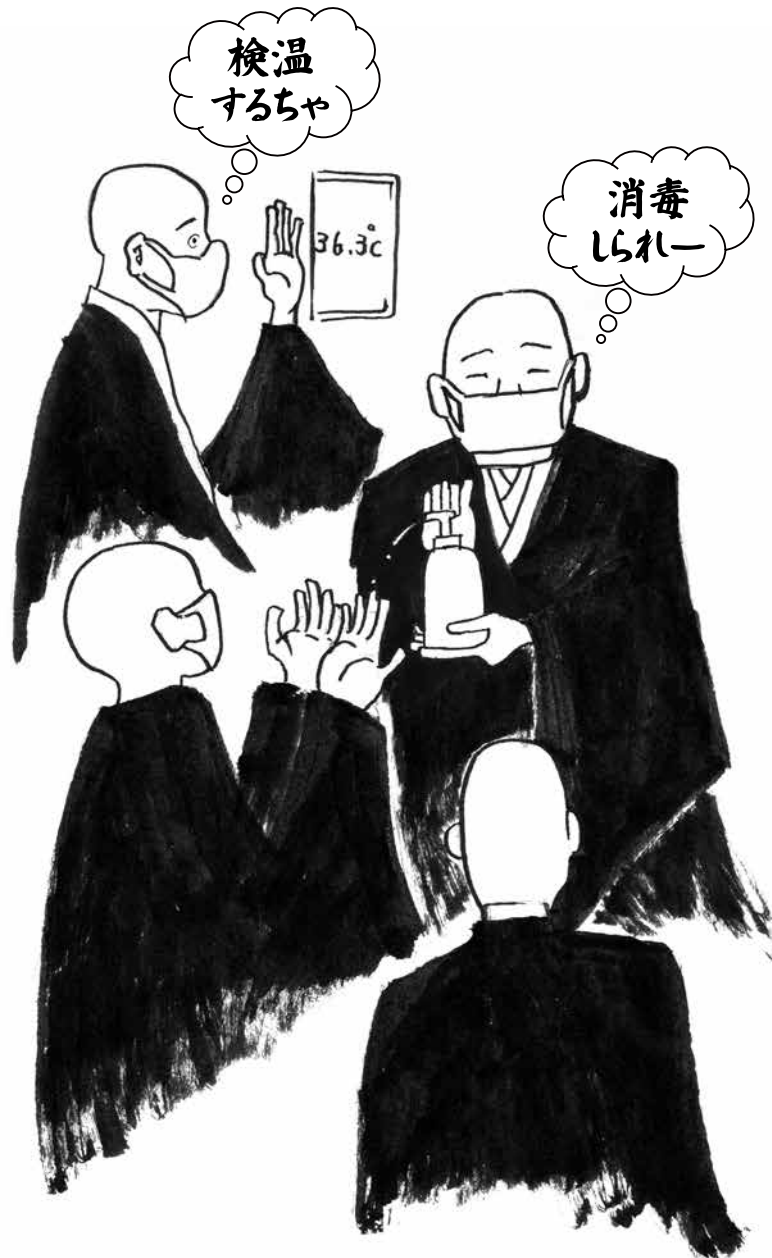
《前任職・住職》

第十一組 淨教寺 住職 石川 法雲	二〇二二年一月十五日 寂
第十組 西元寺 前任職 神 保 靜雄	二〇二二年一月二十九日 寂
第十三組 養現寺 住職 朝 倉 彰	二〇二二年二月 六 日 寂

《前坊守・坊守》

第十組 傳長寺 住職 月 見 洪文	二〇二二年四月二十四日 寂
第十組 報光寺 住職 入 部 法純	二〇二二年五月二十一日 寂
第十組 淨教寺 住職 實 惠	二〇二二年一月二十二日 寂
第九組 永源寺 前坊守 島 倉 慶子	二〇二二年二月二十日 寂
第十二組 相順寺 前坊守 松 永 昭子	二〇二二年二月二十六日 寂





編集後記

昭和・平成・令和と時代が推移。それと共に様々な価値観も変化した。気になるのが仕事への意識。三十年前、栄養ドリンクのコーナー「マシーナル」二十四時間働けますか。今そのような会社はブラック企業、労働局から目を付けられ是正勧告が出される。

昔の職人さんは、時間関係なく納得するまで奮闘努力した。最近「働き方改革」をベースに「同一労働・同一賃金」「有給休暇五日以上の消化」とか。働き方がややこしくなってきた。仕事の目標を達成しようとする場合、画一的でなくてもいいのではないか。以前は、「我慢」「辛抱」が当たり前で逆に美德と考えられていたと記憶している。先ず仕事は辛いことがあり、乗り越えれば楽しみが待っていた。昔を回顧するわけではないが、最近楽しく仕事をしましょう。楽しくなければよい職場でないとの風潮があるよう。国の施策に振り回され、少し偏り過ぎているように思える。自己研鑽のため働き方に縛られるのはちょっと疑問。

最近「SDG's」なる言葉をよく耳にする。持続可能な開発目標「SDG's」と略称される。国連が定めた子どもたちの未来のため世界共通の目標。世界が人類の未来を守るべく目標。日本も積極的に取り入れているらしい。将来の日本を築き上げていくのは今の子どもたち。子ども一人ひとりが自分の能力を伸ばし発揮できる社会、日本全体が互いに認め合うことができる寛容な社会が望まれる。

第十組 真行寺 杉森 達朗

『如大地』第149号はいかがでしたでしょうか。本誌を読まれてのご感想、ご意見等につきましては、同封のアンケート用紙にて富山教務所までご連絡ください。アンケートへのご協力をお願いいたします。